

視野を広げる造形活動 —教育現場における造形指導の工夫についての実践報告—

林 有紀

近年、絵を描くことに対する苦手意識を持つ学生が増えている印象を受ける。また、子どもたちの生活習慣、あそびの変化から子どもの自由な表現活動についても様々な問題があるように思われる。これは教員免許講習会の実技講習時に「視野を広げる」をテーマとした造形活動の記録である。絵画指導の問題点を考え描画活動の役割を改めて問い直し、今後の保育者養成機関での造形活動について考察する。

キーワード：造形活動、描画、苦手意識、描画あそび

1. はじめに

毎年担当する造形表現の授業の初めに受講生アンケートをとるのだが、その中に『問1. 図工は好きですか?』という項目を置いている。夙川学院短期大学児童教育学科一年生71名に聞いたところ

- ・「好き」34名
- ・「嫌い」22名
- ・「普通」・「その他」が5名となった。

例年この時期の学生半数以上が「好き」と答えるのだが、気になるのが、『問2. 図工が好きな、または嫌いな理由』に対する回答の中に「絵を描くのが苦手だから。」というものがとても多いことである。「好き」と答えた学生の約半数の20名も「好きだが苦手」、又は「下手、不器用」とある。また図工が嫌いだと答えた学生の理由は、「絵を描くことが苦手だから」である。その後の授業の取り組みを見てもさほど問題がなく、むしろ器用にこなす学生でも「絵は苦手」と苦手意識があるようだ。その他目立つ回答が、「アイデアが浮かばない」である。

なぜこれ程学生は絵を描くことに対しての苦手意識をもっているのだろうか。幼児教育の現場に携わる意志を持つ学生が「描くこと」の自信を失っていることに問題を感じる。

また毎年夙川学院短期大学における教員免許更新講習で「視野を広げる造形活動」というテーマで講習を行っており、ここでも造形活動に対する苦手意識を持つ指導者の声を聞く。「造形活動に自信が持てないために、子どもたちの表現力を伸ばすことができない。」「自分自身が少し苦手な分野なので少しでも克服し、子どもたちへ上手く指導できるようになりたい」などという意見が講習会への要望の事前アンケートの中に見られる。また、子どもたちの表現力の低下を懸念する声もあった。子どもたちがすることに自信を持たず、出来上がる作品が委縮している印象を受けることがあるとのことである。このことは、文頭の学生の苦手意識と繋がっているように思われる。どうすれば子どもたちが生き生きとしたのびやかな表現活動をすることができる環境を創り出すことができるか。まずは、子どもたちの表現を引き出す存在である指導者自身の「視野を広げるため」の造形活動を講習

の中で提案した。そこで改めて表現すること、ものを作り上げていく過程をたどりながら今後の保育者養成校の造形指導について考察する。

2. 「視野を広げる造形活動」

この講習会を行うにあたり、事前に「実技講習に対する要望」のアンケートをとると次のような回答を得た。

- ・「この講座を通して私自身の苦手意識を克服するとともに今後子どもたちのイメージを広げることができるようになりたい。」
- ・「子どもたちに苦手意識を持たせることなく楽しく造形活動を指導したい。」
- ・「子どもの生活、あそびの中で子どもの造形における表現が委縮している。どうしたら子どもがのびのびと造形活動を行うことができるか知りたい。」
- ・「身近な素材を用いて、すぐに現場に活かせるアイデアが欲しい。」 　　など。

講義は1クラス30名160分で大きく2つのテーマに分け実習形式で行い、最後に鑑賞時間とまとめを行った。参加者は主に保育士、幼稚園・小学校教諭様々な年代の現役指導者である。

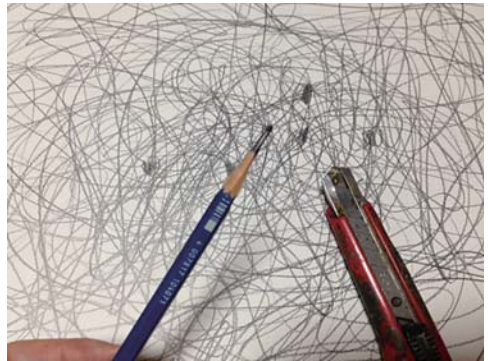
3. 実技講習

1) 描画あそび①「素材をあじわう～上下のない絵」

絵が嫌いになる理由の一つが、「上手くかけない」ということであろう。まずは、絵を描く目的を「よい作品」をつくるためではなく「描くことを楽しむ」ことに置き、描画あそびを行う。最近の学生の傾向として、はじめのアンケートのように、「下手」「発想力がない」「不器用」など表現に対する自信のなさ、自己肯定感の低さを

を表す回答が目立つ。その原因の一つが経験不足による達成感の欠如にあると考えられる。また、成果主義にとらわれた教育の中で評価に過敏になりすぎていることもあるだろう。ここではまず、作品は評価されるために作るのではなく、その作品を創る過程が大切で「表現すること」を経験することに目的があることを説明する。まずは様々な感覚（視覚・聴覚・触覚など）を意識しながら簡単な描画あそびを行うことにより素材を味わうことをテーマとする。

＜準備物＞八つ切り画用紙（白）・鉛筆（2B以上）・木炭・クレパス（黒）・ねり消しゴム



＜作業の手順＞音を聞きながら線を重ねる。

曲ごとに描画素材を変えて、画面に線を引く。

1. 鉛筆での描画 ヴィバルディ「四季・春」(3.05)
2. 木炭での描画 リスト「愛の夢」(4.22)
3. クレパスでの描画 モーツァルト「ホルン協奏曲」(3.38)

＜留意点＞画材はさまざまな持ち方をする・丁寧に集中する・線を目でおう・手ざわりを味わう・周囲のことは気にしない・音と手元に集中する。

現場でも子どもが「概念画」ばかり描くようになる時期に「概念崩し」として「なぐりがき」

を行うことはあるが、ここではひたすら描線を目で追い、色々な感覚を働かせながら線を引いていく。また線を重ねていくだけではなく、消す、こする、という作業によって画面と格闘する感覚、対象物との一体感を感じるほどに素材に関わることを試みる。画用紙の下には新聞を敷き、枠にとらわれずにのびのびと線を引いていく。絵を描いているというよりは様々な素材が他の素材とのかかわりから違う物質、質感に変化することを感じ取りながら作品を作り上げる。

表現を自由に楽しむことの条件の一つは他人の目を気にすることなくリラックスして集中できる環境であることだ。今回、絵を描き始める合図としてクラシックの音楽を流した。曲の間は他人のことは気にせず自分の作業に集中する合図としての曲の使用である。曲調によって描く線に変化が現れる。



2) 描画あそび②「音を絵にする～目に見えないものを描く」

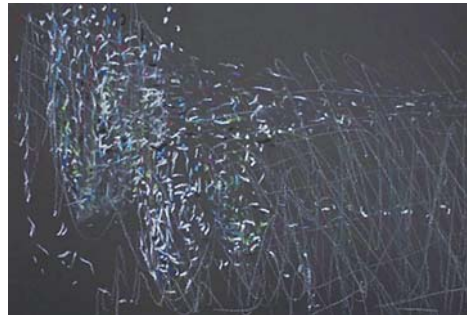
画家パウル・クレーの言葉に「美術は目に見えないものを見させるものなのだ」というものがある。初期の子どもの絵は本来言語以外の表現手段であり、目に見えるものをそっくりそのまま、「上手に」描くということが目的でないのであるが、成果主義のもと大人にとっての「見

栄えのよさ」を基準に絵画指導が行われている現実もあるのではないか。ここでは音を聴いて、頭の中でイメージを膨らませその色、形、情景をそのまま画用紙に描き出すことを試みた。

<準備物>黒画用紙「8切り」・クレパス

1. 音楽を聴く（ベートーヴェン、月光）（音を聴きながら、色、形を思い浮かべる）
2. そのまま音楽を流しながら曲のイメージを画用紙に描いてみる。

20分ほどの時間で様々なイメージの作品が出来上がった。抽象的な色、形での表現、幻想的な情景での表現、など。もともと目には見えないイメージの表現のため完成に「正解」も「優劣」もない。描く側のそれぞれの気持ちの赴くままに表現された作品の多様性は目をみはるものであった。



3) 描画あそびの発展「3D レイヤー絵画」

上記の描画あそびは、素材を味わうこと、活

動そのものを楽しむことが目的であるが、ここから更にその描画あそびからの発展を提案した。

先ほどの①の絵は線の重なりで構成された画面で線による奥行や空間ができていたが、今回さらに、その作品を加工し奥行のある空間を作り出す。

<準備物>

- ・画用紙4つ切り1枚
- ・①の描画作品
- ・色紙、ペン
- ・カッターナイフ、ボンド

<作業手順>

1. 描画あそび①の作品を6分割にする。
2. 6分割にした絵から5枚選ぶ。
3. (1から5枚まで順に大きくなるよう中心に穴をあける。
4. 4つ切り画用紙で切込みを入れた3角柱をつくる
5. 3角柱の切込みに5枚の絵を差し込み穴から3角柱を覗いてみる。
6. 創作を加え、独自の空間をつくる
7. タイトルをつける



この覗き込んだ空間は5枚の絵画がレイヤー状に重なり線の重なりと画用紙の重なりがより不思議な空間を生み出す。この空間にさらに手

を加えることによって独自の空間を生み出すことができる。色画用紙でそれぞれの層に具体的な動物などの形、色を加えることによって、視覚の面白さに加え、物語性のある空間にも発展させることができる。本来日本の庭園や、舞台美術などの空間の広がりはいったんこの平面の平行な重なり、レイヤー状の感覚で構成されており、日本人にはなじみのある立体の空間ではないだろうか。参加者はそれぞれ自分の作った空間をのぞきながら、色画用紙などで、具体的な形を付け加え思い思いの世界を作り上げていた。



4. 実技講習会 作品鑑賞と感想

1) 作品鑑賞会

教員免許講習会では終りに以下の方法で鑑賞

会を行った。

- ・机の上に設置した作品の横に、氏名とタイトルをつけたコメント用紙を置く。
- ・各自筆記用具を手にそれぞれの机の上の作品を鑑賞し、その作品に対する感想、コメントを記入する。



2) 実技講習会の感想

以下は受講者の講習に対する感想の抜粋である。(原文そのままを使用)

<自分の保育に活かすなら>

- ・「一人ひとり出来上がった音のイメージを横につなげていき音楽の流れを符線のようにみんなの音の絵にする。」
- ・「童謡やピアノのリズム、強弱に合わせて、クレパスで好きなようにイメージを膨らませて描いてみたい。」
- ・「子どもたちの曲にも色々のテンポや調の曲があるので取り組みやすい曲(長さも大事)を選んでやりたい。」
- ・「私自身、描画が苦手で保育の中で描くということが少なくなってしまっている気がする。音楽をかけての描画は集中できると思う。『あれを描こう』ではなく自由に描いてみるというのは子どもたちにも新鮮だと思う。しかし、逆に『どうしたらいいかわからない』という子もいると思う。手の動くままに思い切り描くということも体験できるようにしたい。
～(中略)私は考えすぎてそれを表現できなくなってしまうタイプだ。そのため子どもたちに完成品を求めてしまい、子どもたちの『絵が苦手』という意識を生み出してしまっていることに気付いた。描く中で生まれてくるものを大切に子どもたちの『楽しい』『またやりたい』という気持ちを引き出していけるようにしたい。素材をしっかり知るといのも今のうちに体験しそこからどう応用していったらいいかを考える力が芽生えるようにしていきたい。」
- ・「音楽は静・動・速・遅など様々な種類の音楽を子どもの実態に合わせて選ぶ。ときには小さな紙を沢山配り短い音を聞かせてその音からイメージする。形や色を1種類の音につき1枚書き込む。そして音から生まれた多くの形や色を大きな画用紙の上に構成しなおし、絵でハーモニーを作る。鑑賞する。」
- ・「絵にするならば、作曲者や、題名がわかっているほうがよい。曲ではなく何か生活の中の音、水や風、電車など通る町の音、無作為に立てた様々な音など「音」から発想することを授業にいかしたい」
- ・「音楽を聴きながらのクレパス画も同じ曲でも人によって色々な表現がある。人の作品を見ながらその人の感じたことが伝わってく

る。子どもの絵を通して子どもの心を見ることができるよう保育者になっていきたいと感じた。」

- ・「描画も線だけしか描いていないけれど立派な作品になりました。線だけの作品をいろいろな素材で描くことによってもっと迫力のある作品ができました。こちらの与え方でもっと幅のあるものができるのではないかと、また、制作の過程を楽しむことの大切さを改めて感じました。」
- ・「絵については現在『なぐり描き時代』の子どもたちに接しているので今日は子どもの気持ちになり作品の精度より課程を楽しんで描きました。音楽を聴きながら絵を描くことについては意図的にやってみたことがなかったのでゆったりとして音楽をききながら思ったように線を描く心地よさを実感しました。子どもたちは筆圧がなく線にならず点を描く子もいますが紙いっぱい描く楽しさを小さいうちから思う存分楽しんでほしいと思いました。あえて一色で表現することで線に集中できるという面も面白かったです。子どもたちにも視覚に加えて触覚も刺激にしながら表現することの楽しさを伝えていけたらよいと思います。」

<鑑賞会について 今後の保育について>

- ・「上手くできかったな、と自己反省するような自分の作品でも他の人から認められる言葉がもらえると嬉しいものである。それは子どもならなおさらのことだと思うので、よし悪しを判断するような言葉ではなくその子の頑張りや工夫をみてほめてやれるよう、自分の感性も磨いていきたいと感じた。」
- ・「自分の作品を人に評価してもらうことはこわかったりするけれども沢山認めてもらえる

表現があったことで自分に自信がもてた。また人の作品を評価するときにもこの作品の工夫したところはどこだろう？テーマをみながら楽しく良いところや工夫したところに目が向き感想がかけた。」

- ・「作っている過程を大切に、一緒に楽しむことで自由に表現することが楽しいことだということを幼児期のうちに身につけられるようにしたい。」
- ・「声をかけながら発する言葉を大切にしていきたい。無理に題名をつけるのではなく、子どものことばやかいている姿勢をもっと大切にしていきたい。」
- ・「保護者の方にも同じ体験してもらい、絵はうまい下手ではないことを感じてもらえたら子どもたちへの言葉がけや関わり方も変わってくると思います。」
- ・「日々楽しいと感じて過ごせること、一人ひとりが大事にされていると感じていれば表現する遊びも大好きになるだろうとおもいます。」
- ・「『正解』『不正解』。とくに塾や幼児教室に通う子はその2つの中で生きている子が多いように思います。その親もそうなので親子または親の工作教室を開いてみたいです。」

5. 今後の保育者養成機関での造形指導についての考察

子ども、学生の絵画に対する苦手意識をなくし自己肯定感を高めるためにはどうしたらよいか。造形指導の場で常に考えていることであるが、やはり大切なことは結果を求める前に経験値を増やすことだと思われる。しかし、そこに至る過程で子どもたちや学生が「やらされている」と感じ、義務感からそれを行うならあまり意味がない。子どもの「してみたい」という興

味を引き出す。そのために描画活動に「音」を取り入れたり、3Dの視覚効果を用いたりしてみたがそれは単にきっかけであり、入り口である。「視野を広げる造形活動」というテーマをもとに、素材あそびからの発展の描画活動、またその描画活動をさらに活かす造形活動の提案ということでこの講習会を企画したが、「視野を広げる」対象は、子どもと保育者、教育者を含んでいる。免許更新講習会というきっかけで、様々な現場の声を聞くことができた。そこで、現場の指導者の抱えている問題もわかる。これから

の子どもたちの造形活動を考えて行く時に保育者養成機関と、教育の現場の繋がりはますます密になる必要性を感じる。また、感想の文章にもあるように、子どもの活動に対しての理解のために保護者とも、造形活動のみならず様々な活動を共にすることが大切であるだろう。そして指導者自身が個人的な苦手意識に囚われることの前に見つめるべき子どもの視点について考えていきたい。

引用文献

- 1) 吉田敦彦 (2000) 抽象絵画のすすめ 美術年鑑社 27

